

教室内多読指導の実践について¹

Extensive Reading in EFL Reading Classes : Action Research

加 島 巧 ・ 木 原 直 美

Abstract

This paper investigates the possibilities of implementing extensive reading in the university classroom where students' English proficiency levels vary. The paper argues that extensive reading is the key to address the difficulties brought by mixed level students in the university English reading class. It consists of two parts. The first half introduces the method using the SRA laboratory reading material and illustrates some potential benefits to the students. The second half explores the method of extensive reading by using a number of English books written in easy English language, such as graded books or leveled books. The potential benefits and limits of this method are discussed.

1. はじめに

この小論では、英語教育の中から Reading の部分を取り上げ、授業での実践報告を行う。まず、加島は、同じクラス内で学力差が一樣でない学生に対応する授業について論じ、次に木原が、英語習熟度の低い学生に対応する授業について論じる。

元来、教室内での英語指導は、同じ教材を使い、一斉に教授する方法で行われている。クラス内に学力差がある場合には、習熟度別のクラス編成で授業を行うことも実施している。本学の場合、科目により 2～3 クラスの習熟度別クラス分けで授業を行うことも実施している。クラス分けの基準は 4 月に行うプレイスメントテストである。本来、英語の能力は、学生一人一人で異なっており、習熟度別のクラス編成を行う場合も、大雑把な分類しかできない。

早稲田大学では、2002 年 4 月から、全ての学部生を対象にした英語教育に力を入れている。そこでの英語プログラムの最大の売りは、圧倒的な少人数制である。² 教師一人に対し学生は 4 人である。このような少人数教育を行うには多くの教員が必要とされる。

そこで、加島は 1957 年にアメリカで開発された SRA Reading Laboratory を使い、自己評価が可能な、読解力に応じた段階別多読指導の実践を行った。この教材の画期的なところは、少人数のクラス編成を行わずに、学生一人一人の英語力に応じた個別指導が行われるところにある。³

¹ この実践報告は平成 18 年度学内研究奨励費（研究題目：「教室内多読指導の実践について」）を元に行われた。

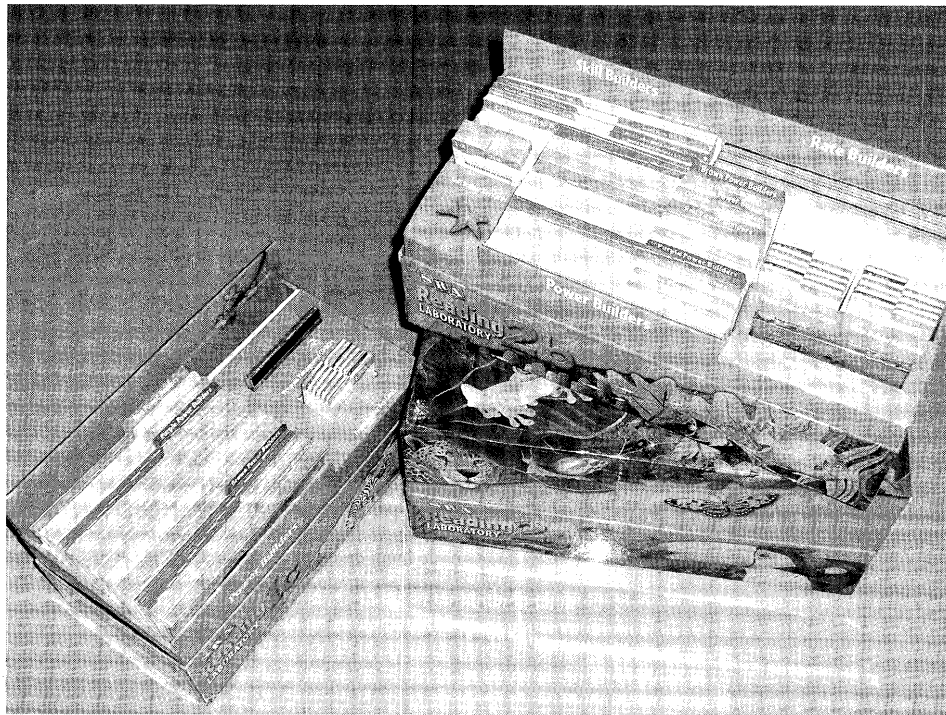
² 中野美知子『英語は早稲田で学べるネットワーク型教育が「大学英語」を変えたー』（東洋経済新報社 2005 年）

³ SELHi 指定校で SRA を利用している高等学校として、「千葉県立千葉女子高等学校」「茨城県立日立第二高等

木原は、易しい英語で書かれた図書を多量に使用する多読指導を行った。多読用図書を充実させることで、英語習熟度の高い学生と同時に、低い学生にも対応できる授業が可能となった。

2. SRA とは⁴

SRA Reading Laboratory は 1957 年にアメリカで開発されたリーディングテキストである。このリーディングテキストは幼稚園児から大学生、一般成人まで幅広い年齢層を対象としている。現在、初級用の First Reading Laboratory から上級向けに合計 11 種類のボックスが準備されている。このテキストを作成した Science Research Associates 社の頭文字を使って SRA と名付けてある。



(左：1c のボックス 右下：2a 右上：2b のボックス)

学校」「大阪教育大学附属高等学校池田校舎」「私立関東国際高等学校」などがある。また、山口県立華陵高等学校と長崎県立佐世保南高等学校は SELHi 指定校であり、その研究開発課題は「リーディング」である。その実施報告書は注目に値する。大学・短期大学での使用校としては、「大学 1 回生必須英語における多読授業の実践」として立命館大学、「一般英語」での利用として筑波大学がある。その他白百合女子大学、大阪電気通信大学、中部大学、南山大学等で利用されている。

⁴ 平成 18 年（2006 年）、19 年（2007 年）の夏に長崎県教育委員会主催の中・高英語教員英語研修会で、加島は SRA の利用法について講義を行った。その際、McGraw Hill 社の萬屋由郁里さんは、アメリカからの資料の取り寄せに際し多大な援助を行って頂いた。また筆者の質問にも丁寧に答えていただいた。ここに記してお礼申し上げる。

今村洋美『SRA リーディング教材の解説と効果的な指導法』マグロウヒル・エデュケーション（2002 年）

この SRA Reading Laboratory の意図するところは、次の四点にまとめられる。⁵

- (1) 理解力、語彙力、読解力を伸ばす。単語についての知識を増やす。学習習慣を身に付ける。
- (2) 生徒の弱点を補強する。
- (3) 様々な分野の読み物を読むことで、生徒の興味を引き、知識を増やす。
- (4) 自主性のある学習を働きかける。

教室内での英語指導は、同じ教材を使い、一斉に授業する方法で普通行われる。⁶ クラス内に学力差がある場合には、習熟度別のクラス編成で授業を行う場合もある。その場合も同じ教材での一斉授業が一般的である。その点、SRA Reading Laboratory は、従来の教材と異なり、学生一人一人の英語力に応じた個別指導が可能なところにある。⁷

3. SRA Reading Laboratory の構成

3-1. Power Builders

Power Builders は SRA のボックスの中心となるカードである。SRA2 のボックスには、10 レベルのカードがあり、各レベルに 15 種類、計 150 枚のカードが用意されている。それぞれのカードは 3 つのセクションからなる。

たとえば、SRA Reading Laboratory 2a の Brown のカード 15 枚は次の内容を学習するようになっている。Brown のカード 1 では、登場人物についての理解度を問う問題が準備されている。同じことはカード 4, 6, 9 にもあてはまる。⁸

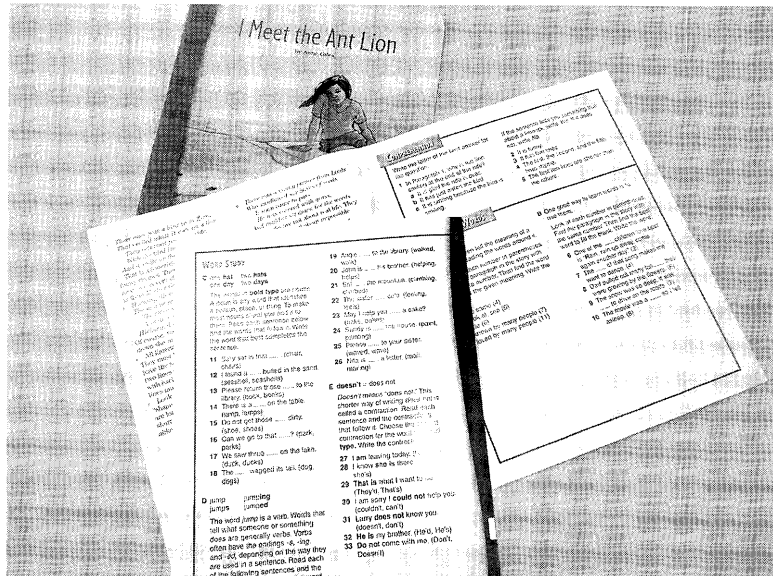
⁵ SRA Reading Laboratory Sample Pack, p.2.

⁶ 及川賢「多読を中心としたリーディング指導の個別化」(『山梨医科大学紀要 第17巻』2000年 pp.113-118)には、全員が同じ教材を同じペースで進める一斉授業の問題点として次の2点を指摘している。

- 1) 学生の異なる学力に対応できない
- 2) 学生の異なる興味に対応できない

⁷ Kevin Bergman「武蔵高等学校・中学校における「個別指導」－Reading Laboratory」SBS ELT NEWS Vol.23, 2003.

⁸ Brown 2.0 の Comprehension の内容一覧と Power Builder Number との対応一覧は、SRA Reading Laboratory Teacher's Handbook, p.62.



(Power Builders)

Brown 2.0

Comprehension	Power Builder Number														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
Cause/Effect					●							●	●		
Sequence			●					●			●			●	
Problem/Solution										●					●
Main Idea		●													
Character	●			●		●			●						
Setting/Mood															
Comparison/Contrast							●								
Purpose/Conclusion															

(1) Reading section

フィクション、ノンフィクション様々な読み物 (2a は 271words ~ 1,285words, 2b は 292words ~ 1352words の語数でテキストが書かれている。)

(2) Comprehension section

Reading section についての理解力を問う質問

(3) Learn About Words section

語彙や単語に関する質問

Learn about Words		Power Builder Number				
		1	2	3	4	5
		6	7	8	9	10
Sections A and B Questions 1-10	Vocabulary: Word Meaning from Context	●	●	●	●	●
	Vocabulary: Using Word in New Context	●	●	●	●	●
Section C Questions 11-18	Initial/Final Consonants: <i>b, d, f, j, l, m, n, p, r, s, t, v, w</i>	●				
	Initial Consonant Blends: <i>sc, sm, sn, st, sp, sk, sw</i>		●			
	Base Words Plus Endings: -s (plurals)			●		
	Word Classification				●	
	Compound Words					●
Section D Questions 19-26	Short/Long Vowels Plus <i>r</i> -influenced <i>a, e, i, o, u</i>	●				
	Compound Words		●			
	Base Words Plus Endings: -s, -ing, -ed			●		
	Word Classification from Meaning				●	
	Writing Signals: Question Mark, Exclamation Mark					●
Section E Questions 27-33	Compound Words	●				
	Study Skills: Using a Table of Contents		●			
	Contractions			●		
	Contractions				●	
	Study Skills: Using Guide Words in a Dictionary					●

3-2. Power Builder Key Cards

これには、Power Builder の答と指示が書いてある。生徒は、このカードで自己採点を行う。Power Builder は Comprehension section と Learn About Words section の二部構成になっているが、Learn About Words section はさらに、三種類の Word Study に関する問がある。それぞれの分野で不得意な部分があれば、このカードの指示に従い、次に説明する Skill Builders のカードに進む。

たとえば、Brown のカード 1 では、Character についての学習なので、ここの正解率が悪い場合には、Skill Builders Card の 245 番を学習するように指示がある。また、Learn about Words に関して Brown のカード 1 では、Initial/Final Consonants: *b, d, f, j, l, m, n, p, r, s, t, v, w* と Short/Long Vowels Plus *r*-influenced *a, e, i, o, u* および、Compound Words についての学習を行うが、理解度に応じて、Skill Builders Cards の 3 と 6、28 ～ 29、32 ～ 35 を学習するように指示がしてある。

3-3. Skill Builders

このカードは学生の不得意な部分を補強するカードである。どのカードに進むかは、学生が Power Builder の自己採点を行う際の Power Builder Key Cards の指示に従う。

3－4. Skill Builder Key Cards

これは、Skill Builder の自己採点を行う際に使用する。

3－5. Rate Builders

Rate Builders は速読練習用のカードである。このカードも Power Builders のレベルに対応したものが同じように 10 レベル、合計 150 枚用意されている。Power Builders は学習者の能力によりカードを読む時間は異なるが、この Rate Builders は全員一斉に行うように指示がされている。1 枚につき 3 分で解いていく。1 回に 3 枚のカードを読むようになっている。

3－6. Rate Builder Key Cards

これは、Rate Builders の答で、自己採点を行う際に使用する。

4. SRA Reading Laboratory の進め方

ここでは、SRA Reading Laboratory 2 のボックスを元に説明する。

4－1. Pretest

まず、自分の読むリーディングテキストのレベルを決めるために 2 種類のテストを行う。Story A はストーリーを読み、5 つの問いに答え、Story B は 8 つの問いに答えるもので、時間はそれぞれ 3 分間である。合計 13 点であるが、スコアに応じて次のレベル（色）のテキストから開始するように指示してある。

スコア	3 以下	4	5	6	7	8	9	10 以上
カード	Brown	Brown	Lime	Aqua	Blue	Blue	Purple	Violet

2a のボックスは Brown-Lime-Aqua-Blue-Purple-Violet-Rose-Red-Orange-Gold の 10 段階に分かれている。Leading Laboratory 2a,b,c のボックスは Grade 4 から 6 を対象にしているが、2a のボックスには、表に示すように、Reading Level 2.0 から 7.0 レベルのテキストが含まれている。この数字は、読解力のレベルを示すものである。

Brown	Lime	Aqua	Blue	Purple	Violet	Rose	Red	Orange	Gold
2.0	2.5	3.0	3.5	4.0	4.5	5.0	5.5	6.0	7.0

スコア	3 以下	4	5	6	7	8	9	10 以上
カード	Lime	Lime	Aqua	Blue	Purple	Purple	Violet	Rose

2b のボックスは Lime-Aqua-Blue-Purple-Violet-Rose-Red-Orange-Gold-Brown の 10 段階に分かれている。Reading Level は 2.5 から 8.0 であるので、2a と 2b の Lime から Gold のレベルは同じである。2b は 2a よりも若干高い段階からスタートすることになる。

Lime	Aqua	Blue	Purple	Violet	Rose	Red	Orange	Gold	Brown
2.5	3.0	3.5	4.0	4.5	5.0	5.5	6.0	7.0	8.0

4－2．読書開始

自分の読むレベルが決まったら、Power Builders と呼ばれるテキストを読んでいく。それぞれ 15 種類のカードがあるので、ボックス全体で 150 枚のリーディングテキストがあることになる。それぞれの Power Builder にはリーディングテキストと内容理解の問題、語彙力、読解力を問う問題がついているので、生徒は、Student Record Book に答えを記入していく。その際、開始時間と終了時間を記入し、1 枚のカードを読むのに必要な時間を記入するようになっている。⁹

⁹ SRA Reading Laboratory 2a Student Record Book, pp. 22-61.

22

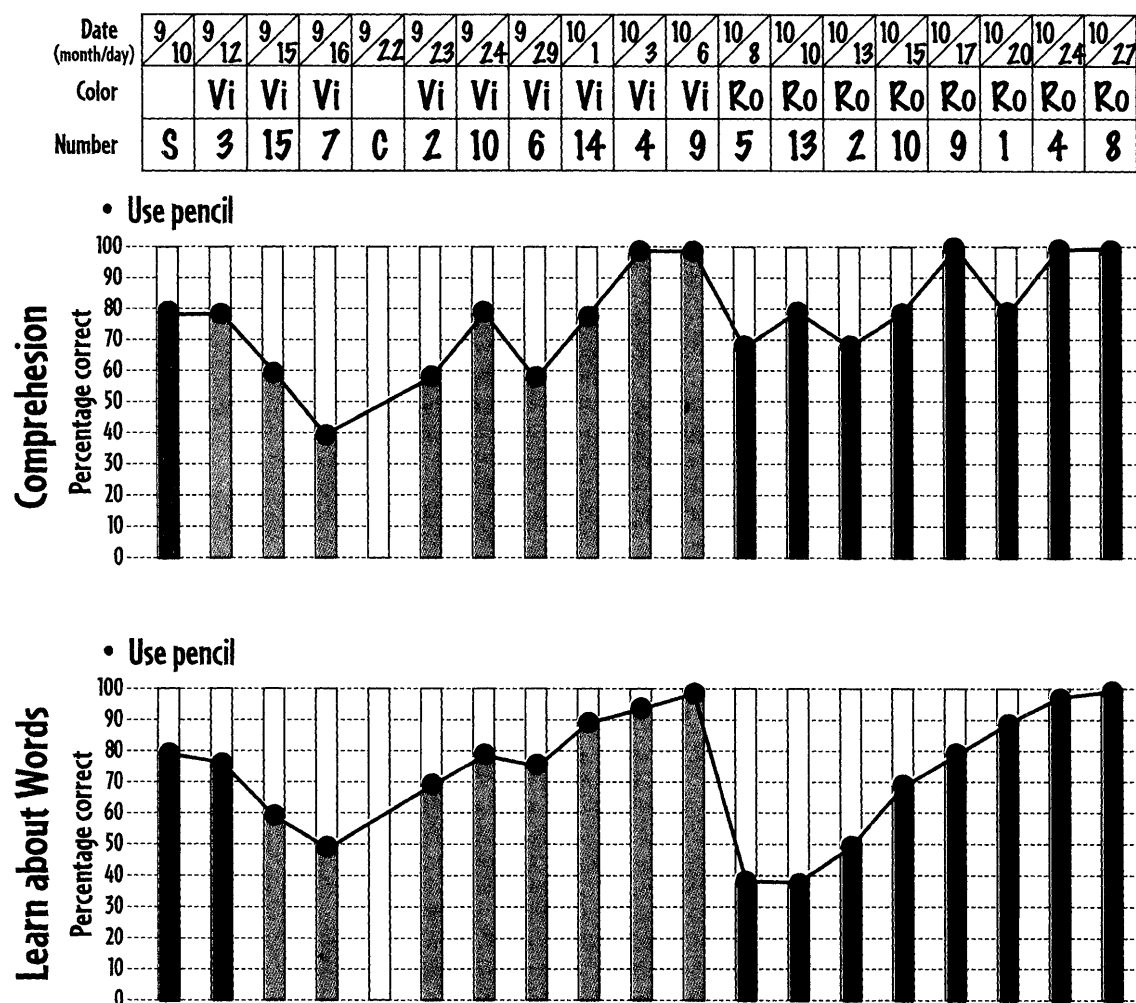
– 48 –

メスターの授業を進めた。) ¹⁰

Sample Power Builder Record Page		7 <u>muffled</u>	31 <u>yes</u>
Date (month/day) <u>Sept. 18</u>		8 <u>slipped</u>	32 <u>yes</u>
Power Builder color <u>Purple</u>		9 <u>thieves</u>	33 <u>yes</u>
Power Builder number <u>12</u>		10 <u>hugged</u>	Possible correct <u>33</u>
Starting time <u>10:15</u>		11 <u>wish</u>	Number correct <u>29</u>
Finishing time <u>10:55</u>		12 <u>wipe</u>	Percentage correct <u>88</u>
		13 <u>whole</u>	I believe my work on this Power Builder was
		14 <u>whose</u>	
Comprehension		15 <u>winter</u>	<input type="radio"/> poor <input type="radio"/> fair <input type="radio"/> good <input type="radio"/> excellent
1 <u>a</u>	6 <u>a</u>	16 <u>white</u>	I could do better next time by
2 <u>b</u>	7	17 <u>won</u>	
3 <u>④ c</u>	8	18 <u>(wist/ed) whistled</u>	
4 <u>c</u>	9	19 <u>E</u>	
5 <u>② b</u>	10	20 <u>I</u>	
Possible correct <u>6</u>		21 <u>E</u>	<u>reading the</u>
Number correct <u>4</u>		22 <u>E</u>	<u>story more</u>
Percentage correct <u>67</u>		23 <u>I</u>	<u>slowly and</u>
		24 <u>I</u>	<u>reading the</u>
Learn about Words		25 <u>E</u>	<u>directions</u>
1 <u>(valuable) dear</u>		26 <u>I</u>	<u>more carefully.</u>
2 <u>gruffly</u>		27 <u>Yes</u>	
3 <u>sneak</u>		28 <u>(Yes) No</u>	
4 <u>(bright) glaring</u>		29 <u>No</u>	
5 <u>patted</u>		30 <u>Yes</u>	
6 <u>boasting</u>			

¹⁰ Sample Power Builder Record Page は SRA Reading Laboratory 2a Student Record Book, p.16.

9月10日から10月27日までの Progress Chart は SRA Reading Laboratory Teacher's Handbook, p. 45.



5. SRA Reading Laboratory を使った結果

2006 年度に春・秋学期にそれぞれ SRA Reading Laboratory 2a, 2b を使用したので、ここでは、その結果を報告する。

5-1. 2006 年春学期（学生数：38）

（開始時と終了時及び読んだカードの枚数）

	Brown	Lime	Aqua	Blue	Purple	Violet	Rose	Red
1	Brown3	Lime4						
2	Brown4	Lime2						
3	Brown4	Lime3						
4	Brown4	Lime7						
5	Brown5	Lime4						
6	Brown5	Lime3						
7	Brown3	Lime4	Aqua3					

8	Brown4	Lime5	Aqua1					
9	Brown5	Lime3	Aqua3	Blue2				
10		Lime6						
11	Brown4	Lime4	←					
12		Lime3	Aqua7	Blue1				
13		Lime3	Aqua4	Blue1				
14			Aqua3	Blue4				
15	Brown3	Lime3/1	Aqua2	←←→				
16		Lime3	Aqua2/3	←→				
17		Lime3	Aqua4	←				
18			Aqua9	Blue2				
19			Aqua3	Blue3	Purple3			
20			Aqua5	Blue3	Purple3			
21			Aqua4	Blue4	Purple3	Violet1		
22				Blue8	Purple1			
23			Aqua5	Blue4	←			
24				Blue4	Purple3	Violet1		
25				Blue5	Purple4	Violet1		
26				Blue5	Purple3	Violet1		
27				Blue3	Purple5	Violet3	Rose1	
28				Blue3	Purple3	Violet3	Rose3	
29					Purple3	Violet5		
30				Blue3	Purple3/2	←→		
31					Purple5	Violet4		
32					Purple6	Violet4		
33					Purple4	Violet5	Rose1	
34					Purple6	Violet4	Rose1	
35					Purple3	Violet3	Rose3	Red1
36						Violet6	Rose2	
37						Violet9	Rose1	
38						Violet4	Rose3	Red1

10の学生は開始時のまま。11、17、23の学生は開始時より下がった。15の学生は開始時より2下がり、1上がった。16、30の学生は開始時より1下がり、終了時には開始時に戻った。

5 - 2. 2006 年秋 (学生数 : 37)

		Lime	Aqua	Blue	Purple	Violet	Rose	Red
1		Lime7	Aqua2					
2		Lime3	Aqua3	Blue2				
3			Aqua4					
4		Lime3	Aqua3/3	←→				
5			Aqua4	Blue4				
6			Aqua5	Blue2				
7			Aqua6	Blue2				
8			Aqua3	Blue3	Purple2			
9			Aqua3	Blue3	Purple2			
10			Aqua3	Blue4	Purple1			
11				Blue4				
12				Blue8				
13				Blue8				
14			Aqua4	Blue3/1	←→			
15			Aqua3	Blue5/1	←→			
16				Blue4	Purple3			
17				Blue5	Purple3			
18				Blue3	Purple3	Violet1		
19					Purple8			
20					Purple4	Violet4		
21					Purple4	Violet4		
22					Purple5	Violet2		
23					Purple6	Violet1		
24					Purple6	Violet2		
25					Purple7	Violet1		
26					Purple7	Violet1		
27					Purple3	Violet4	Rose1	
28					Purple4	Violet4	Rose1	
29					Purple3	Violet3	Rose4	
30						Violet7		
31						Violet3	Rose4	
32						Violet4	Rose4	
33						Violet5	Rose2	
34						Violet6	Rose2	
35						Violet3	Rose4	Red1
36						Violet3	Rose3	Red2
37							Rose7	

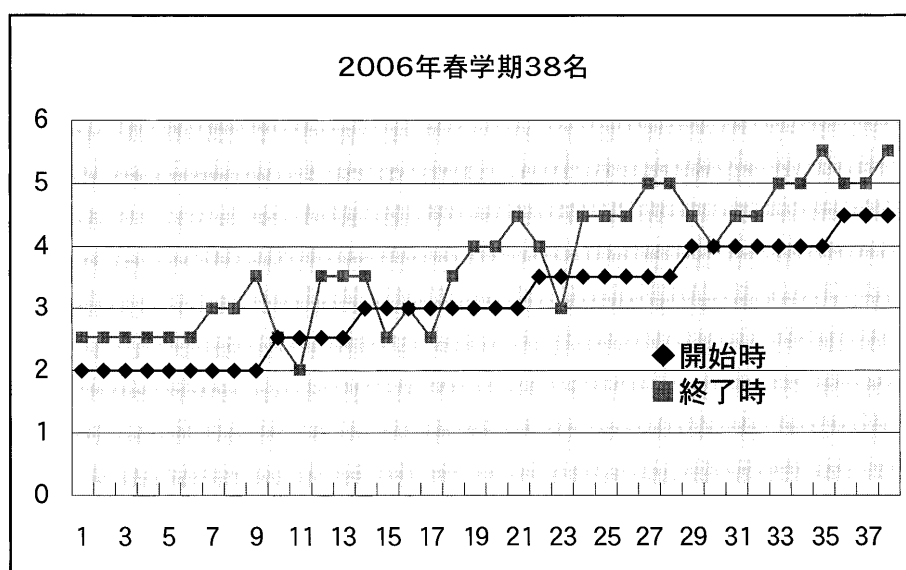
4、14、15の学生は開始時より1下がり、終了時には開始時に戻った。

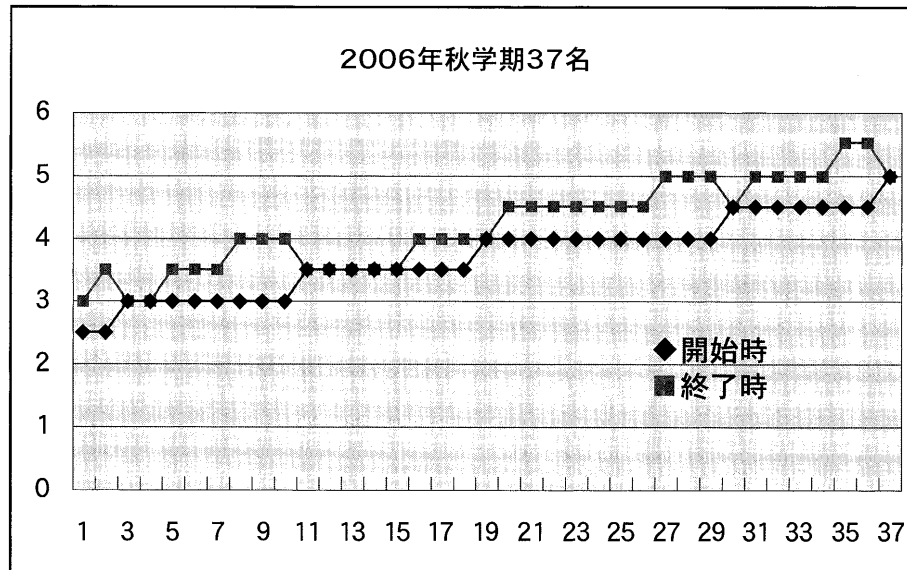
5－3. 2006年の授業実践から分かった事と学生アンケート

- (1) 春学期・秋学期ともに、学生の半数以上は終了時には開始時よりもレベルを上げることができた。ただし、レベルの上がらなかった学生が、春学期に3名、秋学期に9名いた。また、レベルを下げた学生が春学期に4名だが、秋学期はいなかった。

	1下がった	開始時のまま	1上がった	2上がった	3上がった
春学期	4名	3名	14名	12名	5名
秋学期	0名	10名	18名	9名	0名

- (2) 春学期の開始時の読解力の平均は3.1、終了時は3.8であった。秋学期に受講した学生は半年間英語の授業を受講していたせいなのか、開始時の平均は3.7と春学期の終了時点に近いスコアであった。また終了時は4.2であった。ところが、半年間の伸びを計てみると、春学期は0.64、秋学期は0.47であった。





5-4. 2006 年春学期のアンケート¹¹

1. この授業を受けてみてどうでしたか

- 1) 初めてのことで最初はなれなかったが、楽しんで受けることができた。
- 2) 自分のペースで、自分のレベルに合ったものが出来るので良かった。
- 3) 黙々とやれるので、自分には合っていたように思う。
- 4) 様々な話が読めるから楽しくはある。だいたい自分のレベルに合った問題が出来るので、悪くはないと思う。
- 5) 面白いと思う。英語力が伸びたかどうかは分からないが、やり方が斬新だと思っている。
- 6) 思ったよりも量をこなすのが大変。
- 7) 他の人のカラーと比べてしまい劣等感を感じてしまうことがある。内容は面白かったと思う。レベルも自分に合っているものだからちょうど良い。
- 8) 自分にあったレベルからスタートできるのでちょうど良い。
- 9) 点数の経過から見て回を重ねるにつれて上がってきているのでためになっていると思う。ずっと同じレベルでないという点は素晴らしいと思う。
- 10) 復習ができない。

2. 内容やレベルはどうでしたか？できるだけ詳しく書いてください。

- 1) ちょうど良かった。
- 2) 色が変わると少し難しいなと感じるが、やっていくうちに普通になったので、ちゃんと力がついているのかなと思い、良かった。長文の内容的に面白く、後ろの間も良かった。

¹¹ 川口エレン・鵜沢文子「SRA リーディングラボを用いた基礎英語の指導」『白百合女子大学研究紀要』2000年 pp.67-88 を一部参考にした。

- 3) ランクが上がるにつれてレベルも上がるので良いと思う。
- 4) 内容は面白いものが多く、レベルも色が変わるごとに難しくなっているように思う。
- 5) 黙々と英語を読んで解答していくよりも、授業形式や会話形式の方が英語の力が付くのではないかと感じた。

3. この授業は自分にとってためになったと思いますか？

- 1) ためになったと思う。
- 2) 授業の時間内に出来るだけランクを上げたかったのだが、あまり上がれなかった。長い期間続けることで効果が出てくるものだと思うので、まだ続けてやってみたかった。
- 3) 普段、辞書をすぐ使ってしまうため、強制的に辞書なしで読むことで、自分の力を知り、まだまだ勉強しなければいけないと感じた。
- 4) いい経験になったと思う。このような授業は今までなく、これからも受けることは出来ないだろうと思う。
- 5) あまり英語力がついているようには思えません。しかし、単語が分からなくとも全体の意味をとらえる練習はできたので、少しためになったと思う。
- 6) いろいろな物語を読むことができて本当によかったと思う。

5-5. 2006 年秋学期のアンケート

1. この授業を受けてどうでしたか？

- 1) 個人個人で頑張って解いていくというのは非常にやりづらかった。みんなで一斉に時間や量を定めてもらった方が頑張れる気がする。自習みたいだった。
- 2) 自分のレベルに合った教材で授業が受けられるので、最初から英文が難しすぎてついていけないことがなくてやりやすかった。
- 3) 同じテキストをみんなでするより自分に合っていていいと思った。
- 4) 新しい方法で面白いと思った。
- 5) だんだんレベルが上がっていくのが分かって楽しかった。
- 6) 今まで受けたことのない授業で楽しかった。自分なりのペースなので、意欲的に取り組めたと思う。

2. 内容やレベルはどうでしたか？できるだけ詳しく書いてください。

- 1) 自分に合っているのか、自分がどのくらい英語が出来ていないのかがよくわからなかった。みんなと同じ問題なら、みんなできる問題が自分は出来ていない、だからココを勉強しようというように自分のことを知れたと思う。
- 2) カードの色が変わると急に難しくなったように感じる時があったので、もう少しカード間のレベル差が少ないほうが個人的にはやりやすい。
- 3) 自分に合っていた。
- 4) ストーリー自体おもしろかったし、レベルもそれぞれに合っていてよかった。

5) きちんとその人のレベルに合っていたと思う。

3. この授業は自分にとってためになったと思いますか？

- 1) 私自身が、自分自身の力で頑張れるタイプではないので、あまり、自分のためにならなかったと思う。
- 2) 自分の苦手分野がわかったので、ためになったと思う。
- 3) 復習が単語しかできない。
- 4) 自分のレベルに合った問題を解いたので、ためになったと思う。
- 5) 色をレベルアップしたいという気持ちが高まり、授業に対して意欲が出た。
- 6) 多くの文章に触れる点で、とてもためになった。

6. 最後に（多読指導と SRA）

リーディングについて Nuttall は、「理解できないものを読む」ことは「読み方が遅くなる」ことにつながり、ひいては、「英語が楽しくなくなり」「読まなくなる」という連鎖図を描いている。¹² これは、彼女の言葉を借りれば、「読解力の弱い読者の悪循環」(The vicious circle of the weak reader)であり、この悪循環の一つを良いものに変えていけば、「好循環」に変わり、学生の読解力も向上することにつながる。The virtuous circle of the strong reader になるわけである。vicious の部分を virtuous に変える試みをすれば、weak reader は自然と strong reader に変化するのである。¹³

ハワイ大学の Richard Day と文京大学の Julian Bamford は、多読教育の原則として次の 10 点を示している。¹⁴

1. The reading material is easy.
2. A variety of reading material on a wide range of topics must be available.
3. Learners choose what they want to read.
4. Learners read as much as possible.
5. The purpose of reading is usually related to pleasure, information and general understanding.
6. Reading is its own reward.
7. Reading speed is usually faster rather than slower.
8. Reading is individual and silent.
9. Teachers orient and guide their students.
10. The teacher is a role model of a reader.

¹² Christine Nuttall, *Teaching Reading Skills in a Foreign Language*, 1996, p. 127.

¹³ 高瀬敦子は「大学生の効果的多読指導法 易しい多読用教材と授業内読書の効果」(『外国語フォーラム第 6 号』関西大学外国語教育研究機構 2007 年 3 月 pp.1-14) で英語力に大きな隔たりがある学生たちに多読指導が有効であることを示している。

¹⁴ <http://nflrc.hawaii.edu/RFL/October2002/day/day.html>

以上の10項目と先に示した学生アンケートを読み比べると、多読指導にこのSRAボックスの教材は適しているのではないと思われる。

さて、このSRA Reading Laboratoryを使つての授業報告は以上であるが、前章でまとめたように、かなりの効果を挙げたと思っている。今後このテキストを使用する際には、学生のアンケートにも示されていたような問題点を解決しながら、さらに良い方法を模索して行きたい。実は、2006年春学期では、Placement TESTを実施した際と、授業終了時にTOEIC形式の試験を併せて実施した。しかし、この試験では、思ったような結果を得ることができなかった。その理由として2つ考えている。ひとつは、TOEIC形式のテストが学生のレベルに合っていたかどうかの問題である。もうひとつは、1 Semester、15回の授業で目に見える効果を出すのが難しいのではないかとということである。英語の力を付けるには、1年単位、2年単位での展開が必要でないかと思っている。

7. 擬似初心者を対象とする多読指導

以下、英語習熟度（以下「習熟度」とする）が低い学生を対象に、易しい英語図書を多量に使用する多読指導実践について報告を行う。対象は、木原（以下「筆者」とする）が担当する本学の授業「リーディング」を受講した学生である。¹⁵3学期（1年半）の実践を通して明らかになった、多読指導の効果および限界・課題について報告する。

受講学生23名の入学時の習熟度は、高校卒業程度とされる英検2級取得者が0人、英検準2級程度の学生が7名、残りの14名の学生に関しては、英検3級～5級程度であると推定された。さらに、筆者が個人面接を通して調査を行ったところ、10名の学生は、中学校1年生で習得する基礎文法に関しても十分に理解していないことが明らかになった。学生は、中学校・高等学校で6年間英語を学習したにもかかわらず、初心者とほぼ変わらない習熟度であるため、擬似初心者であるといえる。¹⁶

このような擬似初心者が多数存在する授業において、筆者は、数年前から英文のReading活動（以下「リーディング」とする）に関して、以下の問題点を抱えるようになった。

- 問題点 1. 多くの学生が、辞書なしには、容易な英文でさえも理解することができない
- 問題点 2. 辞書を使っても、構文が理解できないために、感覚的にしか意味がつかめないことが多い
- 問題点 3. その結果、与えられた学習課題をこなすのに、多くの時間と教師の助けを要する
- 問題点 4. 授業で学習・復習した内容も、定着せず、問題点 1.～3.を繰り返す
- 問題点 5. 同時に、相対的に高い英語力を持つ学生は、早くに課題を終え、授業に物足りなさを感じる

¹⁵ 便宜上、本稿では「Basic Reading I」「Basic Reading II」「Advanced Reading I」の授業を「リーディング」と総称する。いずれも、英語リーディング力向上を目的とした授業である。

¹⁶ false beginner の意。本稿では、中村朋子の訳語を使用した。中村は、擬似初心者を「目標言語を一定期間学習していながら、その習熟度が初心者のレベルに留まっている言語学習者」と定義している。中村朋子「大学生リメディアル学習のための英語学習ソフトの制作」『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』第4巻、2007年、7頁。

様々なレベルの擬似初心者が存在するクラスに対して、リーディングの一斉授業を行なうことには限界があり、学生個人の現状に合わせた授業形態を模索せざるを得なくなった。

リーディングに特に困難を伴う学生 5 人に対して聞き取り調査を実施した結果、「英語が難しくてわからない」「英文が読めない」「学習課題ができない」、それゆえに「やる気がでない」「(リーディングのための) 勉強をしない」という共通点が明らかになった。これらの学生は、入学後 1 年半経過した時点でも、基礎的な英語力・リーディング力を習得しておらず、習熟度は低いままであるので、「英語が難しくてわからない」「学習課題ができない」という問題も解決されないままであった。このような学生の状況は、相互に影響し合う、図 1 のような負の連鎖構造を構成しているのではないかと考えられる。

図 1 擬似初心者のリーディング学習の連鎖¹⁷

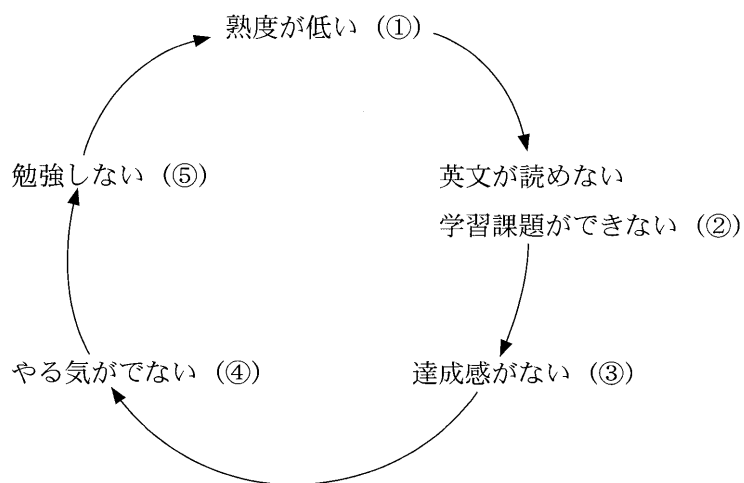


図 1 を、「理解できないものを読む」ことが「読み方が遅くなる」ことにつながり、ひいては、「英語が楽しくなくなり」「読まなくなる」とする Nuttall の連鎖図と比較して、理解できない英文を読もうとすることが悪循環 (vicious circle) を生じさせている、という点で一致する。¹⁸ しかし、Nuttall の連鎖図では「リーディングの遅さ」に注目しているのに対し、図 1 の筆者の学生は、リーディングの遅さではなく、リーディング・スキルの欠如そのものが連鎖の原因となっている。すなわち、英文の構文が理解できないために、たとえ時間をかけたとしても自力ではリーディングを行なえない (英文が読めない (②))。これは、習熟度が低く、基礎英文法・構文を理解していない擬似初心者特有の問題ではないかと考えられる。

¹⁷ 図中の番号は、便宜上つけたものであり、連鎖の起点・終点を示すものではない。

¹⁸ Nuttall, C. *Teaching Reading Skills in a Foreign Language*. Oxford: Heinemann, 1996. p. 127.

こうした状況を打開する一案として、「リーディング」授業では、SRA Reading Laboratory (1c レベル) を試験的に導入した。しかし、英検 4 級～5 級の学生は、最も難易度が低いとされる 1c レベルでさえ難しいと感じ、SRA で意図された通りに作業を進められない学生が残った。なかには、英語の問題文や指示文が全く理解できないために、学習課題を自力で終了できない学生も存在した。このように習熟度が低い擬似初心者は、SRA の教材を使用しても、依然として図 1 の構造の枠内にいることが確認された。

8. 易しい英語図書を使用した多読授業

擬似初心者は、これまでの英語学習の経験から、英語学習に対するモチベーションを失っている。図 1 にみられる、学生にとって好ましくない負の連鎖を改善するためには、まず (③) の状態を軽減させ、逆に、リーディングによる達成感や喜びを数多く体験させることが効果的であると考えられる。そのためには、(②) の「英文が読めない」「学習課題ができない」状態を、「英文が読める」、あるいは英文が完全に理解できなくてもなんとか「学習課題ができる」状態に変えることが肝要であると思われた。「リーディング」授業では、このような場面を提供するために、易しい英語の図書を使用する教室内多読を導入した。

高瀬が指摘しているように、多読といっても、月 1 冊のペースで読むものから、毎日 20 ～ 30 分読むものまで、指導者によってその捉え方は大きく異なっている。¹⁹

筆者が担当する「リーディング」授業では、

- 1) 習熟度の低い学生でも、意欲を喚起できる教材
(図 1 の (②) の問題に対応できる教材)
- 2) 早いサイクルで、達成感が多く感じられるシステム
(図 1 の (③) の問題に対応できるシステム)
- 3) 個人の習熟度に合わせ、学生が自分のペースでリーディングを行なえる環境

が必要であった。「リーディング」授業では、これらの条件を揃えるのに最も適していると思われた、酒井邦秀や SSS 英語学習法研究会が提唱する「100 万語多読」を参考に多読実践の指導計画を作成した。²⁰

「100 万語多読」とは、「ごく簡単な Graded Readers (英語学習者用段階別読み物) や Leveled Readers (英米児童向け学習用段階別絵本) から始め」、多読を行なうことで、「英語のペーパーバックを辞書無しで楽しめる」スキルを習得しようとする英語学習法である。²¹ この学習法の特徴は、100

¹⁹ 高瀬敦子「大学生の効果的多読指導法 易しい多読用教材と授業内読書の効果」『外国語教育フォーラム』第 6 号、2007 年、2 頁。近年、多読指導に対する関心は高まりつつあり、『英語教育』Vol.52, No. 12 (2004 年 12 月号) や、The Language Teacher. Vol. 31, No. 5 (2007, May) では、多読に関する特集が組まれている。

²⁰ 酒井邦秀『快読 100 万語！ペーパーバックへの道』筑摩書房、2002 年。

²¹ SSS 英語学習法研究会 <http://www.seg.co.jp/sssf/>

万語という具体的な目標値を提唱している点で、授業内で実施する場合は、年間 10 万語～20 万語のリーディングを目安としている。日本における大学の平均的なリーディング量は年間 2～3 万語程度であると推定されることから、冊数に限らず語数の面で、多量の読書量を目標とする学習法であるといえる。²²

習熟度の低い学生に多量の本を読ませることには無理があるように思えるが、「100 万語多読」で使用する図書（以下「多読図書」とする）では、使用語彙・構文、総語数が難易度別に制限されており、学習者は難易度の低い図書からスタートして徐々に負荷を上げていくシステムになっている。児童向けの絵本シリーズも使用し、もっとも難易度が低い絵本には、文字がないものや、語数が十数語といった絵本も含まれている。したがって基礎英文法を習得していない擬似初心者でも、挿絵を手がかりにストーリーを追うことが可能であることから、1) に対応できると思われた。

また、難易度の低い図書（絵本）は、総ページ数が数ページ程度であるため、習熟度が低い学生でも、5 分以内に 1 冊を読み終えることが可能である。たとえ、易しい英文で書かれた本であっても、1 冊の英語の本を読み終えることは、ひとつの達成であり、学生はこれを目に見える形で確認することができる。50 分の読書時間であれば 8～9 冊を読破することが可能である。100 冊読破すれば、読破する冊数に比例して達成感を体験することができるため、2) にも対応できると思われた。

多読図書の難易度と総冊数を充実させることによって、3) にも対応できると思われた。学生は自分に合った本を選び、自分のペースでリーディングを進めていけるからである。

「100 万語多読」では、学習者が守るべき 3 原則として、以下のルールを掲げている。²³

原則 1. 辞書は引かない

原則 2. わからないところは飛ばす

原則 3. 進まなくなったらやめる

いずれも、通常の英語学習指導とは大きく異なるが、擬似初心者を対象とする本実践において、この 3 原則は本実践の基本として参考にした。酒井は、クラッシュェンが主張する「affective filter（英語を吸収しようとする際それを妨げるさまざまな心理的障碍）を取り除くことが一番大事」であるとし、affective filter のひとつとして「辞書の引き方がわからない、面倒くさい」ことを挙げている。²⁴

「リーディング」授業の学生も同様の問題を抱えており、辞書を使用する際も教師の助けに依存する傾向にある（問題点 3）。多読導入期に原則 1 を導入することによって、学生の自律的リーディングを促すことができるのではないかと考えられた。いずれの原則も、多読図書の難易度・冊数が充実している場合にのみ実施可能である。

²² 酒井邦秀・神田みなみ編『教室で読む英語 100 万語－多読授業のすすめ』大修館書店、2005 年、5 頁、39 頁。

²³ 前掲書、7 頁。

²⁴ 前掲書、24-25 頁。

酒井邦秀『快読 100 万語！ペーパーバックへの道』筑摩書房、2002 年、34-37 頁。

9-1. 多読の方法

多読を実践した「リーディング」授業は、1年次の春学期・秋学期（以下、それぞれ「学期1」「学期2」とする）には週2コマ開講、2年次春学期（以下、「学期3」とする）は週1コマ開講された。学期1・学期2では、各授業の30分～45分、学期3では、3授業に1回の割合で20～30分を使って多読を実施した。23人の学生が、3学期継続して授業を受講した。学期を通した指導の流れは以下のとおりである。

- 1) 学生に、自分が読みたい本を選ばせ、読んだ本を記録させる（題名、出版社、本の難易度、理解度、面白さ、気になった単語など）
- 2) 教師は、学生が多読を行なっている間、各学生と進捗状況を確認し、場合によっては読む本に関してアドバイスを行なう
- 3) 希望者には本の貸し出しを行なう
- 4) 学期の終わりには、記録表と冊数の伸びを記録した進捗グラフを提出させる

評価方法としては、学期1では200冊、学期2では225冊、学期3では250冊を各学期のリーディング・ノルマとし、このノルマを達成できた学生には、総合評価の40%を与えた。多読以外の授業時間では、口頭訓練を交えながら、精読を目的とした授業をLL教室で行なった。

多読図書としては、『教室で読む英語 100万語－多読授業のすすめ』で紹介されている本を中心に、表1の図書を用意した。学期1には、426冊でスタートし、学期2、学期3は学生のリーディング状況・希望を考慮しながら補充を行なった。

表1 多読図書

学期1（計426冊）
<ul style="list-style-type: none"> ・ Oxford Reading Tree : Stage 1 -9 (208 冊) ・ Longman Literacy Land : Step 0-12 (123 冊) ・ Macmillan Readers : Level 1-2 (25 冊) ・ Penguin Readers : Easystarts (50 冊) ・ Oxford Bookworms : Starters (20 冊)
学期2（75冊補充、計501冊）
<ul style="list-style-type: none"> ・ Step into Reading : Step 1-4 (17 冊) ・ I Can Read Books : Level 0-4 (21 冊) ・ Puffin Easy-to-Read : Level 1-2 (21 冊) ・ Foundations Reading Library : Level 1-5 (10 冊) ・ Cambridge English Readers : Level S-2 (6 冊)
学期3（206冊補充、計707冊）
<ul style="list-style-type: none"> ・ I Can Read Books : Level 0-2 (161 冊) ・ Foundations Reading Library : Level 1-5 (30 冊) ・ Cambridge English Readers : Level S-1 (15 冊)

10. 実践の結果と考察

10-1. リーディング・ノルマの達成率

学期1

学期1には、23人中16人(69.6%)がノルマ(200冊)を達成した。達成しなかった7人については、原因が2つ考えられる。ひとつは、欠席が多かったため、授業内での読書量が減少し、リーディング量が伸びなかったケースであり、もうひとつは、自分の習熟度よりも数レベル難易度の高い本を選んだために、リーディングがうまく進まず読書量が伸び悩んだケースである。後者のケースに関して、ほとんどの学生は、筆者の指導や助言を受ける過程で自分に最も適した難易度の本(辞書を使用せずに物語のストーリーがわかる、あるいは、ストーリーを楽しめる本)を探せるようになったが、数人の学生についてはこの作業がスムーズにできなかった。

学期2

学期2においては、23人全員がノルマ(225冊)を達成している。これは、学期1でノルマを達成できなかった学生も多読のスキルが育って、自分なりのペースを掴むことができるようになったからだと思う。学期2においては、極端に難易度の高い本を選択する学生はみられず、ほぼ全員の学生が、教師の助けを借りずに自分に適した本を選べるようになった。

学期3

学期3では、23人中20人がノルマ(225冊)を達成した。3人達成できなかったが、その原因は、授業内多読時間の減少であると考えられる。学期1・学期2においては、「リーディング」授業が週2コマ開講であったため、各授業の30～45分(週に60～90分)を多読に充てることが可能であった。しかし学期3では、「リーディング」授業は週1コマ開講になるため、多読用の時間は3授業に1回、20～30分程度しか確保できなかった。学生は、就職活動等で授業外にリーディング用の時間をとることが難しく、その結果、ノルマへの取り組みにも専念できなかったと考えられる。

10-2. リーディング・ノルマ設定の効果

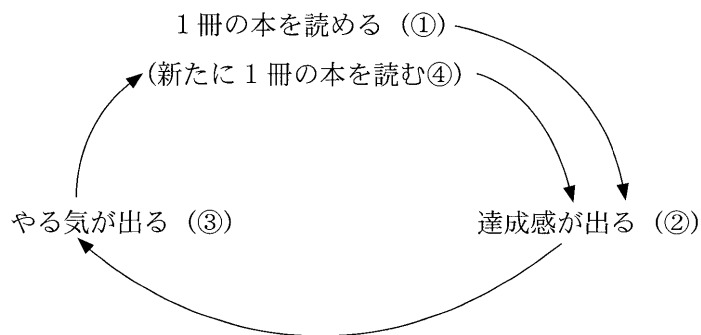
「100万語多読」では、affective filter になりかねないとして、数値目標などのノルマを設定しないよう提案されている。²⁶しかし、3学期の多読実践の結果、「リーディング」授業の学生においては、ノルマの設定があることで目標が具体的になり、その目標の達成状況についてクラスメート同士が励まし合う様子が見られるようになった。多読導入期においては、ノルマの設定が効果的であったと思われる。

今回の多読指導では、リーディングの記録の際、多くの多読指導で一般的に用いられている語数カウントではなく、読んだ本の冊数を記録させた。「100万語英語」でも指摘されているように、多

²⁶ 前掲書、70頁。

読導入期においては1冊の総語数が少ないことから、伸びが見えにくい語数カウントよりも、冊数に焦点を絞った方が学生のやる気を高めることができると思われる。²⁷ また、それぞれの図書に語数は記載されておらず、学生は読み終わる度に語数を計算、あるいは一覧表にて調べる必要がある。こうした面倒な作業がリーディングの妨げになるのを防ぐためにも、多読導入期における冊数のカウントは効果があるのではないだろうか。学期2終了時に行なったアンケート調査では、21人中8人(38.1%)の学生が自分の読んだ具体的な冊数を挙げ、「自分が英語の本をこんなに読めるとは思わなかった」「うれしい」「自信になった」「来期はもっと読みたい」と書いている。易しい英語で書かれたものであっても「本を1冊読みきる」という達成感の経験が、読破冊数を積み上げることで増幅され、図1の連鎖図は、図2のような新しいプラスの連鎖に変化したのではないかと考えられる。

図2 多読によって変化したリーディング学習の連鎖



冊数のカウントが、導入期にある程度の効果を生んでいると考えられる一方、図書の難易度が上がるにつれ、限界も生じる。難易度が高くなれば、総語数や総ページ数は増える。その結果、1冊を読み終えるのにも長い時間を要するため、冊数で指定されたノルマをこなすのは容易でなくなる。学期3では、学生の中に、リーディングを進めるため難易度を下げ、短い時間で冊数を増加する本を選ぶ学生も出てきた。

表3は、学生が読んだ冊数を、語数に変換したものであり、図3はそれをグラフ化したものである。図3でわかるように、学期1・学期2で多量のリーディングを行っていた学生1と学生2は、学期3でリーディング量が大きく落ち込んでいる。学生1は、学期1の27.7%、学期2の36.2%、学生2は、学期1の55.7%、学期2の23.0%しか読んでいない。読書記録を詳しくみると、2人ともノルマはどの学期も達成しているものの、学期3では難易度の高いOxford bookwormsシリーズやPenguin Readersシリーズのリーディング量が減っている。いずれも、学期3で授業内の多読の時間が大幅に減少し、リーディング・ノルマが負担になったため、このような読み方になったものと思われる。多読が定着し、難易度を上げられるようになった学生に対しては、冊数によって設定されていたノルマを語数カウントに変える、あるいはノルマの設定をやめる、等の措置が必要であるかもしれない。

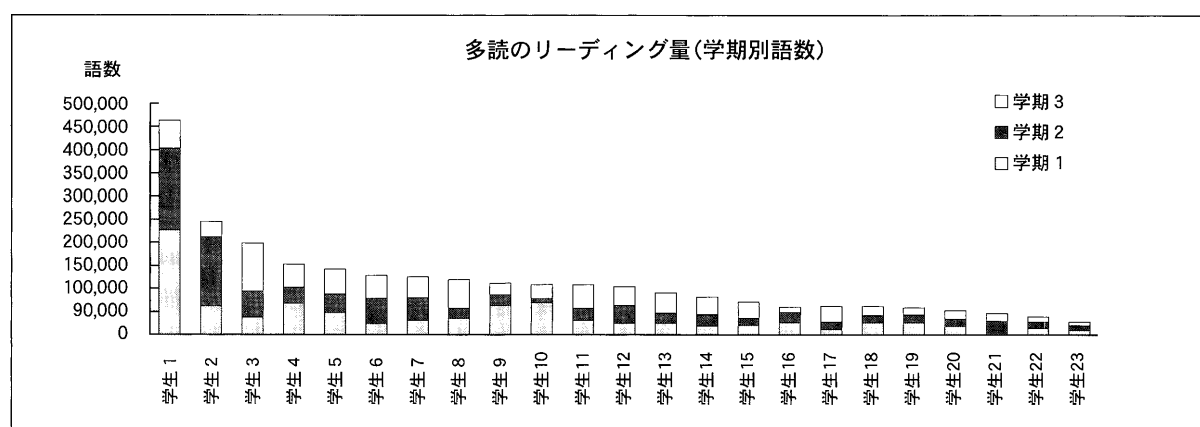
²⁷ 前掲書、52頁。

表 2 多読のリーディング量 (語数) ²⁸

	学期 1	学期 2	学期 3	合計
学生 1	227,083	173,640	62,958	463,680
学生 2	61,645	149,492	34,335	245,472
学生 3	36,180	55,938	104,775	196,893
学生 4	67,700	34,065	50,430	152,195
学生 5	47,070	38,033	56,436	141,538
学生 6	21,075	55,550	51,680	128,305
学生 7	26,168	50,630	45,660	122,458
学生 8	34,890	17,418	64,031	116,339
学生 9	60,898	19,095	27,533	107,525
学生 10	66,390	10,823	29,040	106,253
学生 11	28,005	26,558	51,280	105,843
学生 12	20,913	38,645	40,201	99,758
学生 13	22,133	20,725	44,380	87,238
学生 14	15,550	23,463	38,525	77,538
学生 15	17,243	13,810	34,310	65,362
学生 16	25,345	22,768	10,085	58,198
学生 17	8,075	17,290	31,130	56,495
学生 18	25,878	12,960	16,613	55,451
学生 19	19,745	20,453	14,761	54,959
学生 20	18,190	11,075	16,713	45,978
学生 21	2,260	22,910	13,805	38,975
学生 22	9,390	14,460	9,330	33,180
学生 23	4,708	10,340	8,320	23,368
クラス平均	37,675	37,397	37,232	112,304

単位：語 (words)

図 3 多読のリーディング量 (学期別語数)



単位：語 (words)

²⁸ 変換については、古川昭夫・伊藤晶子（著）酒井邦秀（監修）『100 万語多読入門』コスモピア、2005 年、234-235 頁、238-240 頁を参考に、筆者が計算を行なった。

10-3. 多読実践を通じた学生の変化

10-3-1. リーディングに対する学生の姿勢

多読開始直後には、「本の選定に戸惑いリーディングが集中できない」「難易度の高い本を選んでしまったためにリーディングがうまく進まない」「周りのクラスメートのリーディング速度が気になってリーディングに集中できない」学生がみられたが、アドバイスを受け、読書量が増えるにつれ、自分のペースが上がってきた。学期1の後半以降は、学生全員が教室内でリーディングに集中できるようになった。また、学期1の途中から、多読図書の中から共通の本を読むことで、学生間の共通の話題が増える、興味を持った学生が自分で本を購入し、休暇中も自主的に多読を行なう、など主体的な姿勢がみられるようになった。

こうした姿勢は、学期3終了時に行ったアンケート結果でも明らかになった。22人中21人が、多読の経験を「良かった」、1人が「どちらともいえない」と回答している。「良くなかった」はなかった(図4)。「良かった」理由(複数回答)について、「楽しい」(18人:85.7%)が最も多く、「本のストーリーが好き」(16人:76.2%)「本の登場人物が好き」(15人:71.4%)といった「本の魅力」を理由に挙げたものが続いている。また、「わからない単語があってもストーリーが推測できるようになった」(14人:66.7%)「単語の意味を推測できるようになった」(11人:52.4%)学生が半数を超え、辞書不使用は、必ずしもリーディングを阻害するものではなく、むしろこれらの学生の場合には、多読原則1が効果的であると推察される。人数は多くないが、「読むスピードが速くなった」(7人:33.3%)「語彙が増えた」(5人:23.8%)「多読以外の英語を読むのが苦痛でなくなった」(4人:19.0%)「多読以外の英語を、以前より良く理解できるようになった」(3人:14.3%)「文法的知識がついた」(2人:9.5%)等、英語力を自己評価している学生もいた。「どちらともいえない」学生(1人:4.5%)は、学期3でノルマが負担だったとコメントしており、ノルマを下げることを希望している。ただしこの場合にも、多読自体は「楽しい」ので「今後も続けてほしい」とし、ノルマの設定についても、「読んだ冊数が増えていくのはうれしい」と回答している。

図 4 多読の感想

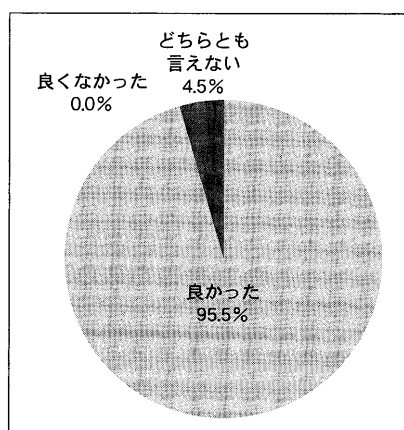
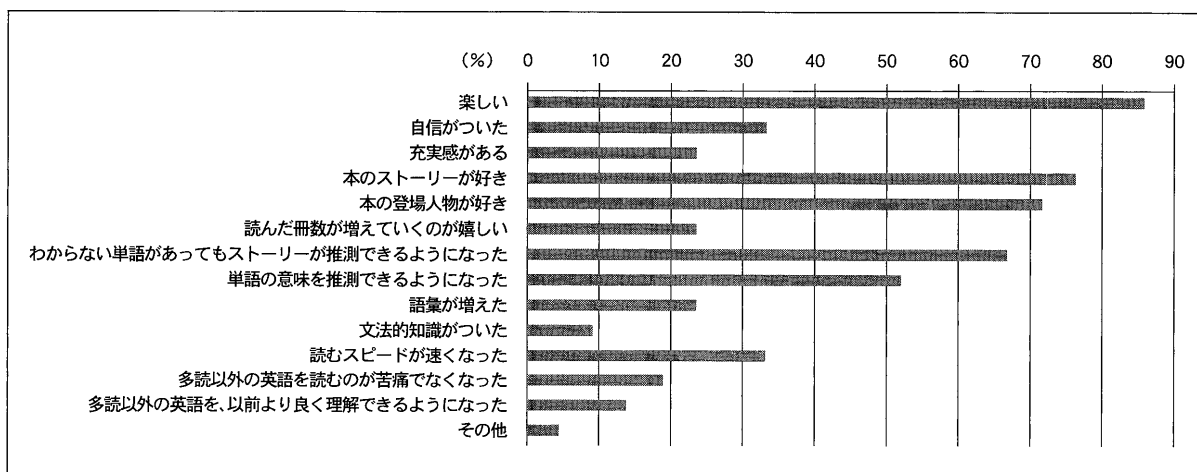


図 5 多読をして「よかった」理由（複数回答）



10-3-2. 学生のリーディング力

アンケート調査では、7割近くの学生が「わからない単語があってもストーリーが推測できるようになった」と回答しており、この実感が多読へのモチベーションになっていることは明らかである。

しかし、学生のストーリー「推測」には疑問が残る。表4は、学期1・学期2・学期3の終了時に行なった、リーディングの内容を要約させた小テストの結果である。テスト問題には、Penguin Readers シリーズ・レベル1とレベル2、Oxford bookworms シリーズ・レベル1の本から短編を抜粋し、学生には辞書を使用せずに英文を読ませた後、日本語でストーリーの要約を作るよう指示した。

表3 学期終了時のリーディング・テストの結果

	テスト問題	結末 (twist) まで 理解できた学生の割合
学期1 終了時	『Money Talks』 ²⁹ Penguin Readers レベル1 総語数約 712 語	21.7% (5/23 人)
学期2 終了時	『Old Friends』 ³⁰ Oxford Bookworms レベル1 総語数約 721 語	91.3% (21/23 人)
学期3 終了時 (A)	『Never Leave Your Name』 ³¹ Penguin Readers レベル2 総語数約 289 語	47.8% (11/23 人)
学期3 終了時 (B)	『Don't Lose Your Teeth』 ³² Penguin Readers レベル2 総語数約 268 語	0% (0 人 /23 人)

出題した作品には、全て、最後に意外な結末 (twist) がある。表3では、この「結末」まで理解できた学生の割合を示したものであるが、正答率にばらつきがみられる。特に、学期3 終了時に出題した『Never Leave Your Name』と『Don't Lose Your Teeth』は、同じ著者による同レベルの作品であるにもかかわらず、正答率は不安定である。すなわち、学生のストーリー推測力は、リーディングの内容によって大きく左右する傾向にある。また、『Don't Lose Your Teeth』を最後の結末まで理解できた学生は0%であることから、最も多くリーディング量を達成した学生（学生1 や学生2）でも、Penguin Readers レベル2 の難易度の作品では、必ずしもストーリーを常に正確に推測できているわけではない。一方、『Old Friends』に関しては、23 人中 21 人 (91.3%) がストーリーの展開を結末まで正しく理解しており、その中には、多読開始時点ではリーディングに対して苦手意識を抱いていた英検5 級程度の習熟度の学生も含まれている。

本実践では、結末についての解答の不安定さを十分に説明することができなかった。結末推測力は、学生の学習特性とのかかわりがあり、必ずしも英語力だけに左右されるものではないことが伺われる。しかし、本実践においては、リーディング学習における負からプラスへの連鎖の変化を主目的としたため、その分析は行なえなかった。

²⁹ Taylor, N. "Money Talks". *The Gift of the Magi and Other Stories by O. Henry*. Harlow, Essex: Pearson Education Limited, 2000, pp. 22-25.

³⁰ West, C. "Old Friends". *The Butler Did It and Other Plays by Bill Bowler*. Oxford: Oxford University Press, 2001, pp. 6-11.

³¹ Key, P. and Kirby, S. "Never Leave Your Name". *Stranger than Fiction: Urban Myths by Phil Healey and Rick Glanvill*. Harlow, Essex: Pearson Education Limited, 2000, pp. 22-23.

³² Key, P. and Kirby, S. "Don't Lose Your Teeth". *Stranger than Fiction: Urban Myths by Phil Healey and Rick Glanvill*. Harlow, Essex: Pearson Education Limited, 2000, pp. 20-22.

1 1. まとめと今後の課題

3 学期における多読を通して、「リーディング」授業の学生は、約 2 万 3 千語～46 万 3 千語のリーディングを行なった。各学生に対応する図書を用意することで、全員がリーディングを行い、問題点 5 は多読開始直後に解決できた。また、習熟度が低い学生においても、難易度の低い図書を用意することで、自力でリーディングを行なうことが可能となり、問題点 1・3・4 の状況もなくなった。学生は、多読を肯定的に受け入れており（23 人中 23 人）、リーディングを「楽しい」（23 人中 19 人）と感じている。このことから、多読は、「リーディング」授業のような様々なレベルの擬似初心者が混在するクラスにおいて、

- ① 最も習熟度の低い学生でも取り組むことのできるリーディング素材を提供できる
- ② 習熟度の異なる学生全員に対応することができる
- ③ 学生のモチベーションを引き出すことができる

ことがわかった。図 1 のような状況に陥りがちな擬似初心者にとって、多読は、主体的な学習姿勢を促す効果的な学習方法であるといえる。

しかし、今回の多読指導では、リーディング行為そのものを継続させることに主眼を置き、量の蓄積と fluency（「リーディングのスピード・流れ」の意）の向上を目的としていたため、学生がどの程度理解していたのか、accuracy（「英文の正確な理解度」の意）に関しては十分な解析を行なえなかった。学期末毎に行なったリーディング・テストでは、作品によってはストーリーの推測が可能であることが確認できたものの、学生の語彙力・文法知識の向上を示すデータは得られなかった。「辞書を使っても、構文が理解できないために、感覚的にしか意味がつかめないことが多い」という問題点 2 は、依然として未解決のままである。

今後の研究では、多読によるリーディングが、英語力向上にどのような影響を与えているのか明らかにしていく必要がある。「100 万語多読」では、学習者は、「10 万～20 万語」のリーディングを行なった時点で、英語に対する最初の「伸びを実感する」と指摘しており、多読による効果を調査する場合には、少なくとも 10 万語のリーディング量が必要である。³³しかし、本実践では、23 人中 11 人が、3 学期の総リーディング量を 10 万語に達成させることができなかった。習熟度の低い学生は、難易度の低い本においても、多読平均速度とされている分速 100 語でリーディングを行なうことが難しく、そのため、図書の難易度をなかなか上げることができないからである。「リーディング」授業の学生のような擬似初心者を対象とする場合、100 万語はもちろん、最初の 10 万語のリーディング達成にも長い時間を要するため、学習成果をみる前に学習意欲を喪失させてしまうことも十分に考えられる。擬似初心者における多読による効果を検証するためには、多読を長期的に継続させる効果的な指導方法も併せて研究していく必要がある。

³³ 酒井邦秀・神田みなみ、39 頁。